

逃亡者達のランドリー

田端

ガリ

【人物一覧表】

吾妻（30）：結婚式から逃げた社会人

三波（18）：受験に失敗した女子高生

○住宅街・夜

雨の中の住宅街。

吾妻（30）、傘をささずにタキシード姿で息を荒くして走る。

暗い街の中、向かっている方向にひとさわ光るコインランドリーを見つける。

吾妻「コインランドリー……」

吾妻、コインランドリーの中に逃げるように入る。

1

○コインランドリー・夜

古びたコインランドリー。

洗濯機が一つだけ回っている。

三波（18）、机で勉強をしている。

吾妻、ずぶ濡れのままコインランドリーに入る。

吾妻「くそ、ずぶ濡れだ。ああ、これレンタールだった……どうしよう。」

三波、吾妻を不審者を見るような目で

見る。

吾妻、三波に気付き、

吾妻「すみません……」

吾妻、ジャケットを脱ぎ、乾燥機を眺める。

吾妻「いけるかな……」

と、ジャケットを乾燥機に入れようと
する。

三波「縮むよ。」

吾妻「え？」

三波「スーツ縮むよ。」

吾妻「あ……だめなの？」

三波「うん。」

吾妻「そっか……危ない。ありがとう。ごめんね、勉強中に。」

三波「いや……」

と、勉強に戻る。

吾妻、暖房の前に椅子を置き、ジャケットを掛け、乾かそうとする。

三波、ペンを置き、

三波「それもだめ。」

吾妻「え？」

三波「生地痛むよ。」

吾妻「そうなの？」

三波「何も知らないじゃん。」

吾妻「こういうの普段着ないから……」

三波「ふーん……」

三波、勉強に戻る。

吾妻、三波の向かいに座り、ジャケットを横の椅子に掛ける。

三波「え、座るの？」

吾妻「あ……だめ？」

三波「いや、別にいいけど……」

数秒の沈黙。

吾妻、時計を確認し、重たい空気から逃げ出すように自販機へと向かい、コインポタージュを2つ買う。

吾妻、コインポタージュを机に置き、

吾妻「これ……」

三波「え、いや……結構です。」

吾妻「ほら、勉強頑張っているみたいだし。

ね。もらってよ。」

三波「ああ、はい。」

吾妻、コーンポタージュをチビチビと

飲む。

三波「なんでタキシードなの？」

吾妻「え？」

三波「服。」

吾妻「ああ、色々あって……」

三波「……まさか結婚式から逃げ出したとか

……そんなわけないか。」

吾妻、三波から視線を逸らす。

三波「え、当たり？」

吾妻「うん……」

三波「え？え？どういうこと？」

吾妻「そのまんまだよ。」

三波「できるの？結婚式から逃げるって。」

吾妻「まあ。僕が実際にできているわけだし。」

三波「なんで？なんで逃げたの？」

吾妻「いや、いいよ僕の話は……」

三波「今、これ以外の話をする選択肢ないよ。」
吾妻「あるよ。別に。ほら、雨すごい降ってるね。午前中はあんなに晴れていたのに。」
三波「結婚式から逃げた人がいるなら雨も降るよ。」

吾妻「あ、僕のせいなんだこの雨。」

三波「婚約者の涙だよ。」

吾妻「なんか途端に寒く感じてきた……」

三波「で、どのタイミングで逃げてきたの？」

吾妻「……タイミングは……披露宴のお色直

しの時だね。」

三波「え、じゃあ挙式はしたってこと？」

吾妻「……うん、したよ。」

三波「神父に誓ったの？」

吾妻「うん。」

三波「健やかなるときも？」

吾妻「うん。」

三波「病めるときも？」

吾妻「うん。」

三波「一生愛し続けることを？」

吾妻「責任かな……」

三波「（真剣な眼差しで）責任？」

吾妻「結婚して彼女と家族になって、そのうち子どもを授かって、育てて。全部自分だけの問題じゃなくなるわけじゃん。情けない話、その重大さに結婚式の途中で気づいちゃって……気づいた時には逃げてた。」

三波「気づいたら……」

吾妻「衝動だよ。衝動だけでここまで来ちゃった。」

三波「……」

吾妻「はい。僕の話はこれでおしまい。君は？
なんでこんなところで勉強してるの？」

三波「どこで勉強しても別にいいでしょ。」

吾妻「わざわざコインランドリーでやる必要はないでしょ。」

三波「洗濯回してるから。」

と、回っている洗濯機を指差す。

吾妻「あ、あれ君のか。」

三波「そう。」

数秒の沈黙。

三波「……私も逃げてるの。」

吾妻「……逃げてる。何から？」

三波「おじさんと一緒だよ。現実から。」

吾妻、三波のコーンポタージュをよく

振り、開けた状態で手渡す。

吾妻「暖かいうちに。」

三波「ありがとう。」

と、コーンポタージュを飲む。

三波「落ちたの。大学受験。」

吾妻「……」

三波「滑り止めは受かったから、来月から大
学生にはなれるんだけど、第一志望落ちち
やって。悔しいじゃん。考えたくないし。
お金のこともあるし。だから、ほら。」

と、開いている教科書の表紙を見せる。
教科書の表紙には「倫理」と書かれて
いる。

吾妻「倫理？」

三波「そう。私、理系だからまったく必要な

いんだけどやってるの。頭に考える隙間をなくすために。」

吾妻「……」

三波「似てるかもね。」

吾妻「似てる？」

三波「だってお互い逃げてるじゃん。現実から。まあ、おじさんの方がまだいいか。」

吾妻「なにもよくないよ。君と違っていろんな人に迷惑をかけている。現在進行形で。」

三波「でも、逃げた結果、現実が変わったでしょ？私は何も変わらない。生産性のない勉強を続けている。」

吾妻「勉強に生産性のないものなんてないんじゃない？」

三波「あるでしょ。こんなの将来なんの役にも立たない。」

吾妻「いつ役に立つかなんてわからないよ。ほら、サイン、コサイン、タンジェントってあるでしょ？あれ、仕事で僕、使っているからね。」

三波「あれ、使う仕事あるんだ。」

吾妻「そうだよ。僕も学生時代使うことない
だろって思ってたけど、今使っているから。

この倫理の勉強がいつか役に立つかもよ？」

三波「そうかな……」

吾妻「そうだよ。まあ高卒が何言ってるんだ
って話だけど。」

吾妻、コーンポタージュを飲み干す。

三波「ていうか、おじさん。連絡とか来てな
いの？逃げてきたんだから何かしら来るで
しょ？」

吾妻「あ……そうだよね。そろそろ……」

と、スマホの電源を入れる。

三波「（ニヤリと）電源切ってたんだ。」

吾妻「怖くてね。現実から逃げるならこと
ん逃げてやろうって。」

吾妻、電源を入れてすぐに電話が鳴り
だす。

吾妻「あ……」

吾妻と三波、目を合わせる。

三波「誰から？」

吾妻「誓った人。」

三波「神父？」

吾妻「あ、そっちじゃなくて、奥さんになる

予定だった人。」

三波「そっちな。」

吾妻「……出たくないな。」

三波「出なよ。」

吾妻「出なきゃダメかな？」

三波「だめでしょ。まだ逃げるの？」

吾妻「……覚悟決めなきゃね。」

と、緊張で息を止め、ゆっくりと受電
ボタンを押そうとするが、怖気づき、

吾妻「（息を吸い）だめだ！無理！」

三波「頑張りなって！」

吾妻「だって、戻って地獄以外の選択肢ない
じゃん！」

三波「そうだけど、このままずっとここに
いるつもり？ここにいるても何も起きないよ？」

吾妻「うーん……」

三波「おじさん、たぶんいい人だから。何とかなるよ。多分。」

吾妻「多分？」

三波「多分。」

吾妻「多分。そうね。多分。行こう！多分大丈夫。大丈夫！」

と、立ち上がり、コインランドリーの外で電話を始める。

三波、外にいる吾妻の背中を見つめる。
吾妻、声は聞こえないが、話しながら頭を何度も下げている。

三波「（笑って）めっちゃ謝ってる。」

三波、倫理の教科書をそっと閉じ、表紙を見つめる。

吾妻、肩を落とし、コインランドリー内に戻る。

三波「怒られた？」

吾妻「怒るの通り越して呆れられてた。」

三波「もう第2フェーズ入ってるじゃん。」

吾妻「今すぐに戻ってこい。話があると。」

三波「そりゃ話はあるだろうね。一旦、区切りをつけるためにもいいかなとだね。」

吾妻「地獄は確定だから。なるべく穏やかそうな地獄の道を選ぶよ。」

三波「そうだね。」

「ピーピー」と洗濯が終わった音が鳴る。

三波「あ、終わった。」

三波、立ち上がり、大量の洗濯物をランドリーバッグに入れる。

吾妻、洗濯物を見ないように三波に背中を向ける。

三波「おじさん。行かなきゃでしょ？もういきな。地獄が待ってるよ？」

吾妻「うん……」

三波「私はもうちょっと勉強してから帰るか。」

と、元いた椅子に座る。

吾妻「コーンポタージュ。」

三波「ん？」

吾妻、三波の正面に座る。

吾妻「コーンポタージュ飲んだら行くよ。」

三波「いや、行きなよ。」

吾妻「君ももうここにいる意味はないじゃない。」

三波「私はないけど、おじさんはこの後、用事あるじゃん。」

吾妻「今更、遅く行こうが早く行こうが変わらないよ。」

三波「それもそうか。」

数秒の沈黙。

三波「いや早く行った方がいいよ。やっぱり行きなよ。」

吾妻「正気にならないでよ。そのまま騙されててよ……」

三波「てか、おじさんさっきコーンポタージュ飲み干してたじゃん。ほら、もういる意味ないよ。」

吾妻「スープはね。コーンがまだたくさんいる。」

三波「いいじゃん。コーンは。もう取れないから行きなつて。」

吾妻「食べ残しはだめだよ！生産者さんに顔向けできないじゃない！」

三波「（ため息）まあ、いたいならいいけどさ。これで怒られても知らないからね。」

吾妻、缶に残ったコーンを取ろうとする。

三波、自分のコーンポタージュを見つめる。

吾妻「倫理ってさ、何を学ぶの？」

三波「え？」

吾妻「僕、倫理の授業取らなかったから何を学ぶか知らないんだよね。」

三波「知らないのにいつか役に立つとか言ってたの？」

吾妻「うん。学校でやることだから何かしらには役立っだろうなあって。」

三波「おじさん、人生適当に生きてきたでしょ？」

吾妻「ばれた？」

三波「おじさんこそ倫理やるべきじゃない？
生きるとは何かとか教えてくれるよ。」

吾妻「ああ、哲学みたいなこと。」

三波「そうそう。人間は死ぬために生きると
か書いてる。」

吾妻「……僕は僕が生きたために生きたいけ
どな。」

三波「みんなそうでしょ。」

吾妻「滑り止めの大学に行くのは君の生きた
い生き方なの？」

三波「自分が生きたいように生きたいってい
うのはきれいごとで、エゴで、ただのわが
ままなわけじゃん。……実際、行きたくな
いよ。」

吾妻「……浪人とかは？」

三波「こんな夜にこの量の洗濯物を、コイン
ランドリーに回しに来る家庭だよ？ 浪人す
るお金なんかないよ。浪人することも現実
から逃げているだけだと思うし。」

吾妻「未来のために進んでいるなら、それは逃げじゃなくてちよつとした寄り道なんじやない？…こんなびしょ濡れ逃亡タキシードが何言っているんだって話だけど。」

三波「たしかに、世界一説得力ないね。」

吾妻「まあ、君の人生だから、君が決めな。」

三波「うん。」

吾妻、スマホに電話の着信音が鳴る。

吾妻「あ、ごめん。また電話だ。」

三波「うん。」

吾妻、コインランドリーの外に出て、

電話をする。

三波、倫理の教科書を手に取る。

三波「逃げてみるか…」

と、忘れ物ボックスに倫理の教科書を入れる。

吾妻、さらに肩を落とし、コインランドリーに入る。

三波「（ニヤニヤと）もしかして第3フェーズ？」

吾妻「正解。よくわかったね。」

三波「体から負のオーラがありえないくらい出てるもん。」

吾妻「そう？ そうだよね……」

三波「何言われたの？」

吾妻「30分以内に戻らないと……」

三波「戻らないと？」

吾妻「ああ！ 恐ろしすぎて口にできない。」

三波「（笑って）逃げたらこうなるのか。」

吾妻「さすがにもう行くわ。僕を反面教師にして頑張るんだよ。」

三波、吾妻のコーンポタージュを手渡し、

三波「ほら、これも食べきれないと生産者に怒られるよ。」

吾妻「そうか……」

と、コーンを必死に取ろうとするが、苦戦する。

三波「へたくそだなあ。」

吾妻「（缶に口を付けたまま）うるさい。」

吾妻、やっと最後のコインが取れる。

吾妻「取れた。」

三波、吾妻のジャケットを手取る。

三波「うわ！まだびしょ濡れじゃん。」

吾妻「ああ、ごめん。」

と、ジャケットを受け取る。

吾妻「じゃあ、現実に戻るよ。」

三波「うん。地獄をとことん楽しんで。」

吾妻「（苦笑いで）……うん。」

と、コインランドリーを出ようと扉に
手をかけ、振り向き、

吾妻「さっき、嘘ついた。」

三波「え？」

吾妻「サイン、コサイン、タンジェント。」

三波「それが？」

吾妻「全部パソコンが計算してくれるから、
使ったことない。」

三波「（笑って）大人って嘘つきばかり。」

吾妻「逃げずに正直に言ったことを誉めてほ
しいな。」

三波「（うなずき）偉い。」

吾妻「あともう一つ。」

三波「なに？」

吾妻「大人って結構、話聞いてくれるよ？」

三波「うん。」

吾妻「それだけ、じゃあね。」

と、コインランドリーを出て、雨の中の住宅街を走る。

三波「はあ……」

三波、カバンの中から合格通知書を取り出し、びりびりに破き、ゴミ箱に捨て、コーンポタージュを飲み干し、

三波「穏やかな方の地獄に行ってみるか……」

とランドリーバッグとカバンを背負い、コインランドリーから出る。

（完）